

内分泌かく乱物質に関する用語集作成

分担研究者 長村義之 東海大学医学部病態診断系病理学部門

菅野 純 国立医薬品食品衛生研究所・毒性部

研究要旨：

広い分野の知識を要求される学際的問題であるところの内分泌かく乱物質問題は、他分野の研究者との学術的連携の際のも、共通認識の希薄さがその促進の妨げとなっていることが考えられる。本研究班では内分泌かく乱物質問題に関する用語集を学際的立場から、「内分泌かく乱物質問題用語集（仮称）」の編集を開始した。

A. 研究目的

内分泌かく乱物質問題は、その生体影響の作用メカニズムを主に核内受容体を介する遺伝子転写活性制御の基礎生物学的問題に根ざしつつ、その影響がヒトや動物の生殖・後世代影響に如何に現れるかを検討することを最大の目標としているところの、広い分野の知識を要求される学際的問題である。

内分泌かく乱物質問題は、一方で世論の直接的関心を呼び、研究者は時としてマスメディアへの対応に迫られるが、そのときの障害の一つに、この学際的知識の普及の難しさが挙げられる。また、他分野の研究者との学術的連携の際のも、共通認識の希薄さがその促進の妨げとなっていることが考えられる。

そこで、本研究班では、試験法開発と平行して、内分泌かく乱物質問題に関する用語集を学際的立場から、特に内分泌学の権威の最新知識をベースとして、従来の毒性学、バイオ医薬品などの新世代医薬品に対応した新しい毒性学、遺伝子改変動物学を含む実験動物学、内分泌かく乱化学物質の研究過程で明らかとなりつつある点、などの幅広い知識を結

集し、「内分泌かく乱物質問題用語集（仮称）」の編集を計画した。

B. 研究方法

対象者：研究者レベル、出版社：（医歯薬出版）にて、取り上げるべき項目の選定とその文字数の設定を行う。

C. 研究結果

対象者、研究者レベル、出版社（医歯薬出版）にて、取り上げるべき項目の選定とその文字数の設定を行い、今年度は、別表に示す項目を選定した。

F. 研究発表

1. 論文発表

菅野 純、内分泌かく乱化学物質の生物影響、ファルマシア、35、219-223、1999

菅野 純、内分泌攪乱化学物質について-生物学的立場から-有機合成化学協会誌、57、35-39、1999

Kanno J, Ward JM, Maronpot RR,
Mechanisms of chemically induced
thyroid follicular carcinogenesis, in Prog
Clin Biol Res, 394,: Cellular and Molecular

Mechanisms of hormonal carcinogenesis
/Environmental Influences, (editors:
James Huff, Jeff Boyd, J Carl Barrett),
Wiley-Liss, Inc. press, 353-398, 1996